

学科名	建築・デザイン学科							
科目名	住まいの計画							
科目区分	専門科目	単位数	2単位	開講時期	2年次前期			
必修・選択の別	選択必修科目(建築工学コース)／選択必修科目(建築コース)／選択科目(デザインコース)							
担当者	益田 信也							
授業の到達目標 (シラバスから)	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な住宅タイプを学んで、住まいのあり方は多様であることを理解できる(A6、B4) ・住宅タイプそれぞれの成立背景を知ること、広い視野で住まいを観る力を得る(A6、B4) ・同時に、今後の住まいのあるべき姿を考え、構想する力と問題意識を身につける(A6、B4) 							
日程と内容	<p>4/08 導入講義：授業の進め方と概要の説明、成績評価の方法／住まいの変化の要因</p> <p>4/15 農村住宅：住まいと集落景観、屋敷の構成と機能、住宅と生産活動、住宅の社会性</p> <p>4/22 町家：高密度居住のしくみ、生業と家族生活、町なみの形成と変容、町なみの保存</p> <p>4/30 長屋・アパート：密集する下町の住まい、住まいの開放性、同居と近居、定住と流動</p> <p>5/06 中廊下型住宅：伝統的な住様式、家族本位の近代化と封建制、住宅改良運動</p> <p>5/13 作家住宅：建築家と住宅設計、新しい生活像の提案、作品例の分析・考察</p> <p>5/20 都市型住宅：商品化住宅、伝統とモダンリビング、公私室型住宅とLDK構成</p> <p>5/27 地方の住まい：地方の戸建住宅、都市型住宅との比較、続き間座敷の機能と意味</p> <p>6/03 漁村住宅：高密度居住と路地空間、間取りの継承と変容、ムラづくりのシステム</p> <p>6/10 集合住宅（1）：集合住宅の系譜、住戸の近代化と定型化、多様化・変化への対応</p> <p>6/17 集合住宅（2）：定型化した団地の風景と設計基準、高密化と住戸の閉鎖化</p> <p>6/24 コーポラティブ住宅：居住者参加の集合住宅、住まいの管理</p> <p>7/01 これからの都市居住（1）：多様な家族像と居住サービス、高齢者住宅</p> <p>7/08 これからの都市居住（2）：協同居住、まちづくり</p> <p>7/15 これまでの授業の総括、定期試験に向けた総合演習と解説</p> <p>7/22 定期試験</p>							
成績評価基準	定期試験	60%	実技	0%	臨時試験	0%	部外評価	0%
	報告書・レポート	10%	プレゼンテーション	0%	課題	0%		
	演習	30%	計	100%				
授業到達目標の達成度	今年度は定期試験の受験生の72%が合格となり、昨年の86%より大幅に減少した。合格者の平均点は71.1点で、昨年の75.6点より下がっている。定期試験の成績が今年度は平均点70.0点と昨年の75.6点と比べてかなり下がったことが大きい。これは学生の授業内容の理解をより図ろうと、持ち込み形式の試験に切り替えたことから、例年のように傾向と対策がうまく図れなかったことによると判断している。							
反省点	1限目に開講される時間割だが欠席は少ないものの遅刻は多く、出席率ほど受講態度は良くない。後半遅刻を厳しくチェックして少し改善したが手遅れだったかもしれない。また、昨年と同様に、レポートの採点結果を定期試験の前に報告したことは、試験に向けて意気消沈、あきらめ感を生んだのかもしれない。最終的に、定期試験を受験しない学生が10名になってしまった。							
来年度の計画	遅刻をきちんと把握する。 ケータイ・スマホを禁止し、居眠りをしないように手を動かす授業とする。 ノート作成を義務づけて、試験時に活用できるなどの動機付けを行い、自学自習をより積極的なものとする工夫をする。							
授業評価アンケートに対するコメント	総合評価は8.1点(昨年度8.1点)と同じ結果であった。ほとんどの項目で全科目平均値を上回ることはできたが、質問の機会についてのみ平均値を下回っている。これまでは授業カードの交換を通じて質疑の機会を確保しその効果が確認できていた。しかし今年度は、小テストの解答に時間を取られて十分に質疑の時間を確保できなかったことが原因である。							
履修登録者数	108名	定期試験 受験者数	98名	合格者数	71名	合格率	72%	